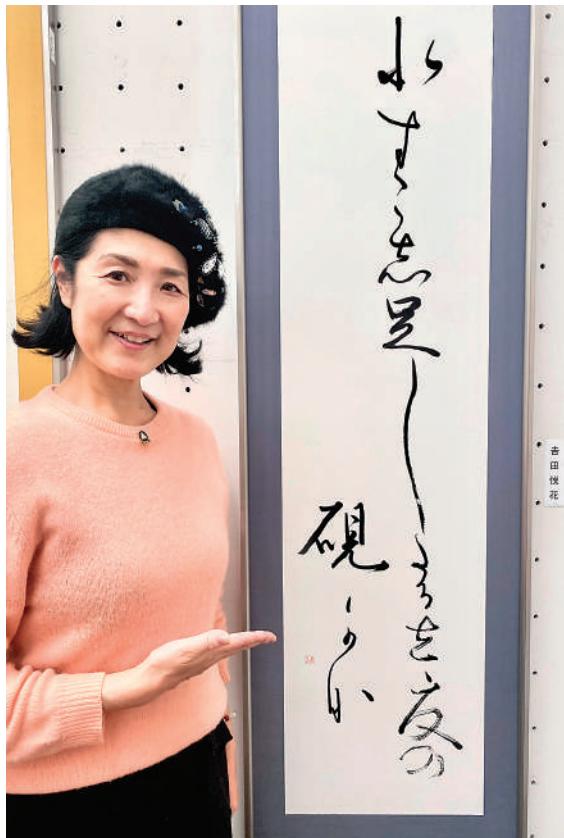




「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく」（第2回）



「水すこし足したる立夏の観かな」 吉田 悅花氏

褒められたことが
心の支えに

「悦ちゃん、姿勢がいいわ
ねえ」。

ノートに文字を書いていた
小学一年生の私を担任の根本
先生は、褒めてくださった。

さらに、三十センチ物差し
を私の目の先から手元にあて
がつて、「そう、理想的な距
離ね」。

教室のみんなに「字を書く
ときは、吉田さんの姿勢を見
習いなさい」とまで言つてくれた。

日頃から落ち着きがなく、
好きなことには集中力を發揮
する一方、まわりとは関係な
く自分の世界に没頭しがち。
どちらかというと、集団行
動に不向きなタイプだった私
を先生は、いつも優しく引き
立ててくださいました。

そんな私が、書道塾に通い

NPO法人 神田雑学大学 最高顧問
エッセイスト 吉田 悅花

もともとイラストや詩を書くことが好きだった私の性分

始めたのは、小学二年生の頃。
商家の末っ子に生まれ育った
母は、私に自ら珠算を教えた。
私が熱心だったのは最初のと
きだけ。飽きっぽいので、長
続きしなかつた。

読み、書き、算盤の算盤を
あきらめて、何かほかの習い
事をということで、母は駅近
くの書道塾を見つけて、私を
通わせることに。

自宅の離れの大きな座敷を開放した書道塾は、たくさん
の小学生でいつも賑わっていた。

5

に合ったのか、毎週通うのが楽しみであった。

あるとき、長い半紙に書初めの練習をしていると、奥の部屋から姿を現した銀髪の男性が、「おお、上手だ。なかなか良いね」と褒めてくださつた。

そして、書道塾の経営をされている奥様に「この子は筋が良いから、よく見てあげて」と言い添えた。

なんだか、とても嬉しく、晴れがましい気持ちになつたのを覚えている。
教師をされていた書家の高木



東扇先生だと知るのは、だいぶ後のこと。
「千葉師範学校を卒業後、生涯を千葉で過ごした高木東扇は、骨格のあるかなを大きく書くことで、壁面芸術の可能性をひき出した現代かな書の変化の道程を間近で学び、千葉の書にも新風を起こしました」ということが成田書道美術館の学芸員ブログに紹介されている。

当時、塾にたまに顔を出していたひとまわりくらい歳上のお兄さんは、東扇先生の息子さんだつた。

つい先日、地元の書道店へ初めて入つて小筆を眺めてみると、「これはタカギアツヒト先生推薦の筆です」とお店の方に言われた。はじめはピンとこなかつたけれど、どうやら私が子どもの頃に師事していた東扇先生のご子息で、日展の内閣総理大臣賞を受賞するなど、現代を代表する書

家の一人となられている高木厚人さんのことらしい。

私は、母の導きで地元の書家に師事したもの、高学年になるにつれ、興味はほかに移り、中学生になると塾通いはやめてしまった。

でも、根本先生と東扇先生に褒められたこと、自分の良さを引き出してくれた言葉は、ことあるごとに心の支えになつていた。

久しぶりに墨を擦り、筆をとつて半紙に向かつて、字を書く。紙上に点が落ち、線が伸びる。字形が結ばれ、一字一行、一幅の書となる。墨の色、字の組み立て、余白まで、その一つひとつに、私の心がそのまま映し出される。

大人になつて書の学びを開して、新たな気づきがあつた。書は私の心の画像である、ということ。そのことに気づいたとき、また新しい世界の扉がぱつと開いたようだつた。

私の心が映し出される

社会人になり、人間学の月刊誌『致知』の編集記者として、取材インタビューに駆け回る毎日になると、書に本格

的に取り組むことはなかつた。その後、独立して、月刊の俳句雑誌の編集長を拝命した。二十代からずっと親しくさせていただいている書家の近沢

昭琴先生から、「悦花さん、せつかく俳句を詠んでいるのだから、自分の俳句をかなの書道作品にされては?」と、お声がけいただいた。それはとても素敵な提案だつた。

人柄はもちろん、現代書道院所属の書家としての実績、指導力とともに素晴らしい美貌の近沢先生に私は弟子入りした。市川のご自宅に毎週、稽古に通うことになった。

昭琴先生から、「悦花さん、せつかく俳句を詠んでいるのだから、自分の俳句をかなの書道作品にされては?」と、お声がけいただいた。それはとても素敵な提案だつた。

人柄はもちろん、現代書道院所属の書家としての実績、指導力とともに素晴らしい美貌の近沢先生に私は弟子入りした。市川のご自宅に毎週、稽古に通うことになった。

久しぶりに墨を擦り、筆をとつて半紙に向かつて、字を書く。紙上に点が落ち、線が伸びる。字形が結ばれ、一字一行、一幅の書となる。墨の色、字の組み立て、余白まで、その一つひとつに、私の心がそのまま映し出される。

大人になつて書の学びを開して、新たな気づきがあつた。書は私の心の画像である、ということ。そのことに気づいたとき、また新しい世界の扉がぱつと開いたようだつた。

私のお稽古は、仕事の合間のほんの一時間ほど。その場で手本を見て、一発勝負。電光石火のように書き上げる。

毎日毎日、地道に書の鍛錬をしている人から見たら邪道だが、先生は「すぐに表現できることだから、感覚が良い」と持ち上げてくださる。

優しくも厳しい先生のご指導に背中を押されながら、私の社会人になつてからの書道歴は十年以上になつた。

書のある生活に感謝して、まさに継続は力なりを、実感している。

我田引水かも知れないが、私があちこちで文章を書かせていただいたら、話したりするのは、その状況に合わせて瞬発力を發揮できるから。そしている人だから、感覚が良い」という度胸と能力が人よりも恵まれている、そう思うことにしている。

それは、子どもの頃から好きなことに集中して、瞬発力を發揮できる環境に身を置いてきたから。

親の理解のもと、良き師に恵まれたことに、まず感謝。その褒め言葉を魔法のように浴びて、好きなことを、自分の個性を伸ばし、また新しい

扉を開く。こうして少しずつ成長できる醍醐味を知ること。私は、私なりに俳句や書道などで実践してきたつもりだ。

井上ひさしさんも言つていますよね。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、

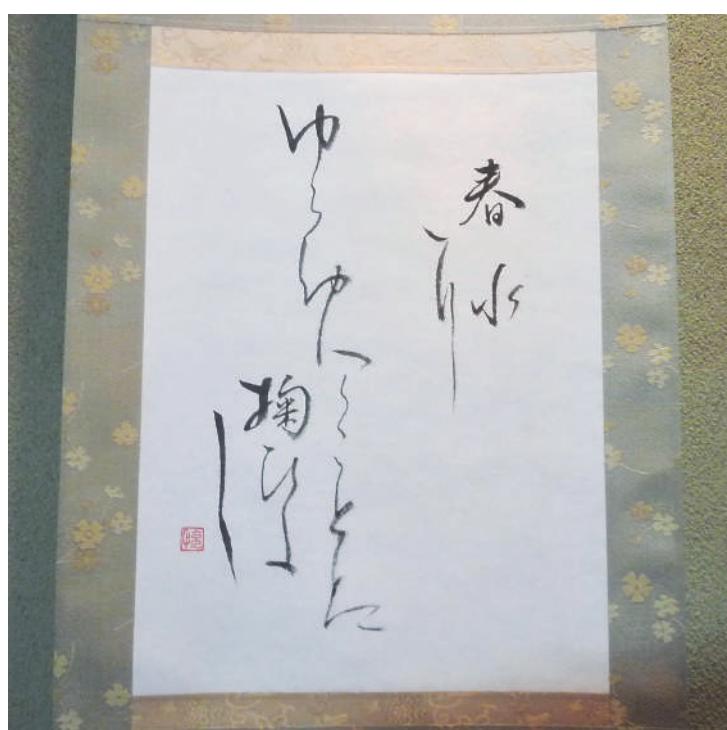
これはまさに、学びの極意。『自分よし』『相手よし』『みんなよし』の実践ではないか。でゆかいに

「春水にゆらめくことば掬ひたし」(悦花句 書)

ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくま



目の前の手本に対峙して、サッと最大限の力を出す。書を通して、私は今、瞬発力を鍛えられているのではないか。そういう感じがある。



「春水にゆらめくことば掬ひたし」(悦花句 書)